

農畜産業は また木材利用の時代へ

高橋 弘行

昔、農村風景と言えば、どっしりした木造わら葺きの母屋に隣接して、これも木造の牛舎や堆肥舎、物置があり、前庭では和らかな日差しの中で放し飼いの鶏が餌をついばんでいる、といった情景を思い浮かべたものでした。当時の農業労働力の主役は人力と畜力だったので、農具はまず人や牛馬の力で扱える程度に軽いものでなければなりません。ここでは、軽くて丈夫な木材が多く使われ、重い金属はスキやクワの刃とか荷車の車軸や軸受けのように、機能上どうしても必要な部分に限って用いられたのです。

しかし、昭和30年代後半に入って農業は一変します。機械化による農作業の省力化、効率化、そして経営規模の拡大です。機械化農業の発展によって、もはや農具は軽いことが第一条件ではなくなりました。役畜は追放され、農民は重労働から解放されました。家族ぐるみの農作業も必要なくなり、農業人口も減ってしまいました。これは同時に、農具からの木の追放でもあったのです。

一方、それまで農業経営の中で細々と副業的に行われてきた畜産も、急速に農業から分離専門化し、多頭飼育に象徴される生産性の高い畜産へ急速に変貌して行きました。多頭飼育は当然のことながら畜舎の大型化を要求します。いち早くこれにこたえたのはブロック構造や鉄骨構造でした。ここでも木材は農業の変革に追従することができず、置き去りにされてしまったのです。倉庫、機械庫、牧草舎などの農業用建造物が同じ運命をたどったことは言うまでもありません。

こうして、次々と木材が農業から撤退して行く中で、逆に新たな需要を生み出したものもあります。家畜の敷料（敷わら）と木質堆肥です。役畜の追放と農業人口の減少は、化学肥料工業の急速な発展とあいまって、労力のかかる堆きゅう肥の生産を消滅させました。昔、農家には必ず1頭か2頭の家畜がいて、収穫物の商品にならない部分は、敷料や飼料として活用されました。ふん尿を吸収した敷料は堆肥にして再び農地に還元され、土に新しい生産の活力を与えるのです。それが、農業と畜産の分離、経営規模の拡大によって、農業は慢性的な有機物不足になやみながら、一方で畜産は敷料の不足、ふん尿公害に手をやくことになりました。この二つを結びつけ新しい有機物循環の流れを作ったのが樹皮やノコくずなのです。木材工場 木質敷料 木質堆肥 農地の図式は、今やすっかり農畜産業に定着しています。

さて、ここ2、3年、畜産分野を中心にようやく木材復活のきざしが見えてきました。たとえば、林産試験場がカラマツ中小径材の用途として開発したPT型ハウス（農業用構築物）が、畜舎や乾草舎に採用され始めていますし、子牛の保育にカーフハッチやスーパーカーフハッチが普及し始めています。これらは、いずれも牛の健康に対する木造の良さが高く評価されてきたからに外なりません。このほか、小径丸太の牧柵、粉粒状木炭の融雪剤、土壌改良資材としての利用も注目されています。また、現在研究中のものに木質食料料があります。飼料自給率の極めて低い水準にある我が国の新しい飼料資源として、木材が日の当たる場所に出るのもそう遠い将来ではないでしょう。

本号では、農畜産分野での木材利用の現状を特集してみました。ここで取り上げた用途は、いずれも木の持つメリットをはっきり主張できる用途です。これは農畜産利用に限ったことではありませんが、新しい用途開発にあたって最も重要なことは、“木でもできる”のではなくて“木だからこそできる”使い道を追求することだと思います。これは過去の多くの用途開発の成功事例が証明しています。

（林産試験場 指導部長）